

山内ふるさと絵図作成研修会報告

テーマ：よみがえる！ふるさと山内

目的：人の記憶を地域の宝とし、未来を創る。

主催：山内エコクラブ（回想遺産プロジェクト）、山内ふるさと絵図作成委員会

日時：平成 27 年 8 月 27 日（木曜日）

13 時半～16 時

場所：山内六友館

内容：1 部 県下での先駆事例 近江八幡市 安土 老蘇地区の川瀬新作氏からの講演
2 部 五感アンケートをもとにしたカテゴリー分け作業

参加者：山内エコクラブ会員、山内ふるさと絵図作成委員会員、
山内地域住民（ゆうゆうクラブ、一般）、地域おこし協力隊 2 人
市民活動ボランティアセンター、土山歴史民俗資料館学芸員、山内地域市民センター
学識経験者他 40 名程

報道【甲賀市広報・中日新聞】

絵図作成の背景

中山間地域である山内地区では、人口の減少、少子高齢化（高齢化率 38%・平成 27 年 3 月）、鳥獣害被害の拡大が進んでいます。このまま問題を放置した場合、地域の人口が減少し、少子高齢化がますます進むことで学校が廃校が目前に迫っています。

そんな状況の中、地域に実態に目を向け、地域のある資源を見直し「ないものねだりでなく、あるもの探し」に取組み、その資源を活かして付加価値を付けて地域ブランド化を進め、地域に対する“誇り”“自信”と“地域の展望”を見出していく取り組み始まっています。平成 21 年からの、当時の老人クラブによる昔の地図の復元と地図解き、山内エコクラブの子どもたちによる聞き書き、平成 23 年からは自治振興会地域福祉部の名人発掘事業、平成 25 年からの古老による回想昔語り等、昭和の記憶を大切に、後世につないでいく事業です。

一方、県下では、県立大学 上田洋平氏による「心象絵図」作成による地域活性が各地で展開され、地域が元気になることが学術的にも認められ潮流となりつつあります。

ここで、山内においても、これまでの取り組みを踏襲して、人材も活かしながら、「山内ふるさと絵図」に取り組んでみようとの声の一つになりました。

本研修会の目的：絵図作成には、地域の方々が主役になることが大切です。

「ふるさと絵図」とはどんなもので、なぜ必要なのか？その活用の方法を先駆に取り組まれた事例を紹介いただき、イメージ化できること、五感アンケートをカテゴリー分けしながら山内のコンセプト作りをする楽しみを感じていただくことを目的とする。

1部 近江八幡市 安土 老蘇地区の川瀬新作氏からの講演 趣旨

1、絵屏風をつくるきっかけ

平成26年10月に老蘇コミュニティセンターが完成する以前の老蘇学区は、各自治体単位と行政のつながりで、公民館活動もなく連携意識も低かった。

老蘇コミュニティセンターが新築されることを機会に、コミュニティセンターが「学区としてのつながり」をめざしていくシンボルにしていきたいと考えた。

その中でも「出会い・つながり」を大切にしようと、子どもから高齢者まで参加できるまちづくり、思いを伝える手段として、県立大学 上田洋平氏の提唱されている「絵屏風づくり」に取り組んだ。

2、コンセプト

- ①聞き取った事実を絵に残し、歴史として未来につなげる
- ②伝えたいもの、伝えなければならないこと（生きざま）を絵に残す
- ③老蘇地区を知ってもらい、つながりと出会いのツールにする



3、プロセス

①50～60年前の老蘇地区について質問した「五感アンケート」を実施。450件の回答を得る。（当時の老蘇地区の暮らしを知っている人）

- 1、今も目に浮かぶ風景、懐かしく印象深い光景
- 2、懐かしい音、印象深く耳に残っている音
- 3、印象深いにおい、思い出に残るにおいや香り
- 4、手足に蘇る感触、肌さわり、暑さ寒さ、熱さ冷たさ、痛さの体感
- 5、思い出の味、印象深い味、味覚体験

②五感アンケートをまとめた「五感マンダラ」を各字ごとに作成して、聞き取り会の素材作り

③第1回 聞き取り会 50～60年前の体験者からの話を聞き、当時を知ること

(平成25年8月)

④第1回目 聞き取り会の話をもとに「小下絵」作成

⑤第2回 聞き取り会「小下絵」をもとに、それを見てさらに詳しく当時の暮らしや思い、大切にしてきたものを教えていただく。

(平成25年10月)

⑥第1回、第2回の聞き書き会の内容をもとに実物大の「下絵」を作成
エピソードのスケッチを描きこんでいく 実物大は、畳2枚分

⑦地元の方に見ていただき、描かれた下絵の表現が当時のものと正しいかの確認

⑧修正した下絵を和紙に写す

⑨地元の小学校に場所を借りて、着色作業住民の皆さんのふるさとへの思いを聞き書き会に参加した4人の絵師グループが描き上げた(平成26年9月)完成



※平成になり、新しい入居が始まって20年が過ぎているので、現代の新幹線やニュータウンの様子を描くことで、次の世代に送るメッセージなるのではないかと途中から加筆した

- ・センターの完成と合わせなければならないので、期限を切りながら進めた
- ・県立大学の上田先生にはよく来ていただいた



3、絵屏風効果

上記のプロセスを経ることで、当初には「どうしてこんなことをするのか」という考えの方々が故郷への愛着を見せ変化していった。

- ・各集落で開催の高齢者サロンに座卓を囲んで語り合いに使用した。
- ・認知症予防につながる
- ・地元小学校へのふるさと学習教材
- ・県内外からの視察→出会い、つながり、ひろがり
- ・マスコミ・テレビ・新聞効果



・県内の絵屏風仲間との交流

4、今後の展開 ふるさと絵図カルタ作り

5、予算の取り方

国からの予算、文科省など、地元のお金を使わない工夫

コミュニティセンター新築の際のコンセプトであったので、加算いただいた。

どこにでもある手でする農作業や昔の暮らしには、決して楽な暮らしではなかったけど、豊かな自然の恵みを感じ、モノを大切に作る心、家族のつながり、近所とのかかわりなど懐かしき良き時代の生活があった。

過去に忘れてきた大切なモノ、置いて来てしまったモノを探しだし、持ち帰る“旅の入り口”がこの絵屏風にはあります。

60年余りをこえたふるさと老蘇との「出会い」とその姿を未来に向けて語り継ぐ「つながり」の役割をこの絵屏風は果たしてくれています。

とのことでした。

2部 山内の 五感アンケート (50軒程度) を、カテゴリー分け作業

黒川地区、笹路地区、猪鼻地区の3つの班に分かれて作業。

25名程の方が、作業に参加されました。



参加者の声

- ・川瀬さんの話を聞くことで、なにをしなければならなかった
- ・地元じゃないけど、どこにでもあった昭和 20 年代の光景、山内のことをもっと知りた
いと思った
- ・老蘇地区の絵が素晴らしい
- ・山内でもぜひやってみたいな
- ・生きている間に完成させたい、死ねない
- ・やりながら昔語りをすることが楽しい
- ・自分も役に立てることがうれしい
- ・大変そうだけど、がんばろう
- ・山内には教えてくれる人がたくさんいる、活かしていこう

今後の予定（平成 27 年度中）

- ・9月21日、ふるさと絵図作成委員会と古老グループ合同ワーク開催
のこりの3つの地区の五感アンケートカテゴリー分け

- ・10月～12月 第1回 地域聞き取り調査 6会場
(関西学院大学 3人のゼミ生参加)

聞き取れていない補足は、回想遺産グループで埋めてもらう

- ・平成 28 年 1 月～ 下絵描き

企画：山内エコクラブ 山内ふるさと絵図作成委員会

協力：山内回想遺産グループ

山内地域市民センター 前田、井上

山内ゆうゆうクラブ（老人会）

市民活動ボランティアセンター 宮治

廣岡いずみ ビデオ撮影

記録：事務局 竜王真紀